中臣さんの
環境衛生ウオッチング
第53回

熊本地震・仮設住宅と健康教育

二〇一六（平成二八）年一〇月なかばで、熊本地震から半年が経った。熊本市内では、地震被害の建物の解体や補修が進む。一〇階建てのビルには足場が組まれて、シートが全面に張られていた。亀裂が走る部分に白い印がつけられて、補修作業を待っている。

仮設住宅までの道のり

益城町・テクノ仮設住宅は、阿蘇くまもと空港の近くにある。もともとは工業団地の一角だ。一五六戸の仮設住宅が建った。一〇月中旬、ここで暮らす六〇歳代の女性に話を聞くことができた。

「本震で家の一階がつぶれて全壊になりました。前震で車に避難していたので難を逃れたのです。それから、避難所に入ったあと、ここの仮設住宅へ移りました」

彼女は、ご主人と息子さんと三人で生活する。仮設住宅の間取りは、次のとおりだ。

玄関を入って、六畳分の台所・食堂のフローリングスペースだ。台所の横にトイレ、風呂がある。奥の南側は畳敷きで、四畳半が二部屋ある。収納場所がほとんどないので、日用品など物が空間を占める。

彼女は、地震発生から仮設住宅へ移るまでを話した。

「大きな前震があった四月一四日には、車中泊をしました。翌日は電気が通ったので、家のなかの片づけをして車中泊をしました。その夜中に本震がありました。もし、一階で寝ていたら、助からなかったでしょう」

彼女の一家は、避難場所を移した。

「四月一六日から、町のなかのホテルへ避難して、駐車場の大型バスのなかで過ごしました。複数あったバスに、地域ごとに割り振られたのです。バスの椅子は、リクライニングができました。三日目以降は、自家用トラックの荷台にシートを張って、五月の連休明けまで寝ました」

不自由な生活は続いた。

「それから家族ごとのテント暮らしで五月末まで、六月はじめから七月末まではホテルの建物内で過ごしました。写真撮影の部屋で、段ボールベッドを使って寝ました」

仮設住宅へ移ったのは、八月になってからだ。

「仮設は狭いし、屋根に降った雨の音が響きますね。夏は暑かったです。元々配置されていたエアコンは一台しかなくて、もう一台設置するまで時間がかかりました。設置後に、仮設へ移りました。エアコンがなかったら熱中症になってしまいます。西日が入って暑いのです」

生活環境は日常と違う。

「隣の敷地に、益城町、西原村などの中間ごみ処理施設ができたのです。風向きによって、ほこりが舞ってきます」

仮設住宅の設備の問題もある。

「布団を干すところがないですね。物干し台を買って、設置している人もいます」

仮設住宅に住んで、彼女は感じたことがある。

「各戸を看護師が家庭訪問していますけど、アルコール依存、糖尿病の人など、問題を抱えている人がいるようです。ここでは高齢者が多いと思いますので、健康面が心配ですね」

仮設住宅内のコミュニティの形成は、これからだ。

「来週に、自治会を発足させて地区ごとに会長を選ぶことになっています」

コミュニティの形成とともに、再建住宅や災害復興住宅などへの転居まで健康の維持が課題に思えた。

移り変わる仮設住宅の構造

熊本市塚原仮設住宅での会話だった。役員の男性が、こう言った。

「玄関に網戸が入ったのは初めてですね。阪神・淡路大震災、東日本大震災では、なかった構造ですよ」

仮設住宅の構造は進歩を見せている。一九九五年の阪神・淡路大震災のときの仮設住宅は、工事現場のプレハブ建物を連想させるような作りだった。室内は、畳の和室が中心だった。

高齢者の住まいであっても、ビジネスホテルと同じような水回りのユニット型で、洗面所とトイレ、風呂がいっしょの構造だった。狭い、浴槽の縁が高い、風呂使用後に床が濡れるなど、不便なところが多かった。

二〇一一年の東日本大震災のときの仮設住宅は、プレハブ型の一方で、住宅メーカーや地元工務店などが建てる非画一的な建物も目にした。仙台市の仮設住宅のひとつは、ハウスメーカーが施工に携わった。

掃出し窓は、マンションと変わらないサッシュ枠で重厚なガラス窓が特徴だ。冬期の寒さ対策として、壁に断熱材を入れて断熱性の向上を図っている。こげ茶色に塗装した外壁面は、おしゃれな雰囲気さえ感じさせた。

今回の熊本地震被災地の仮設住宅は、主に夏場の防虫対策として玄関扉に網戸が設置され、窓面の断熱性の向上のために二枚窓が採用された。西原村では、仮設住宅の一部を熊本県の地元工務店が施工した。現場監督者は、こう言った。

「一期工事では、協会の一三社が建設を請け負っています。木造の戸建住宅です。知事の考えで、しっかりした住宅をつくるということで基礎はコンクリートの通常のやり方とかわらないものです。仮設期間の二年、いや一〇年以上の使用に耐えられるものです」

話は続いた。

「木造住宅が五〇世帯つくられ、その奥の用地にプレハブ型の住宅が約

中臣昌広
なかとみ・まさひろ
●保健所 衛生監視員

二五〇世帯分つくられる予定です。こちらの五〇世帯分は、主にテント暮らしをしている人たちが入ることになっています」

建設風景は、通常の家づくりと変わらない。コンクリートのベタ基礎、無垢の木材をふんだんに使ったつくり、ポリスチレンの断熱材、サッシュ窓などを組み込んだ作業が続いていた。

構造設備がよくなったとしても、実際に住むと不都合な点に気づく。熊本市・塚原仮設住宅の生活者の声だ。

「夏は暑かったですね。よしずを立てて、日をさえぎりました。部屋は、上から横から熱くなって、室内に熱がこもるのです。エアコンを二八℃で設定して、扇風機をつけました。敷地のなかは、アスファルトや砂利が熱をもって、気温が三五℃以上になっていましたね」

これから、冬の寒さをどう感じるのだろうか。一般の住宅構造と比べて断熱性が劣る仮設住宅で、暖房の使用、衣類の調節だけで健康を保つことができるか心配である。

冬の夜は、調理、食事、入浴などで水蒸気が室内に残りやすい。暖房をとめた深夜に冷えた壁や窓に結露が発生して、カビの増殖を招きかねない。

東日本大震災のときの仮設住宅では、カビが原因でぜん息発症があったと見られるとの報告がある。心配な点のひとつだ。

また、仮設住宅では薄い壁を通して、隣りの声や音が伝わってしまうと聞いたことがある。実際はどうなのだろうか。生活者の男性は、意外なことを話した。

「音の漏れは、床下から伝わるのです。床下は空洞になっていて、音がその空洞から伝わります。先日、夜中に父がベッドから落ちて、ドスンと響いたことがありました」

床下部分に各戸ごとの仕切りを設けたり、床面に緩衝材を敷いたりすることでの対処ができるのではないだろうか。

集会所を健康教育の拠点に

熊本地震被災地の仮設住宅の敷地には、集会所や談話室がつくられている。それらの施設には、人を引きつける構造的な「しかけ」があると感じた。

ある仮設住宅では、敷地の入り口から各戸へ歩く動線上に建物がある。自然に目がいく。大きな掃出し窓から中の様子を伺うことができて、「何が行われているのだろうか」と関心を引くに違いない。

その窓の外には縁側がある。秋から冬にかけて、縁側に座って日のぬくもりを感じながら談笑する姿が目に浮かんでくる。

室内は、壁や床にふんだんにスギ材が使われている。木のぬくもりを感じるだけではなく、木の香りがただよって心を沈静してくれる。

熊本県では、五〇戸以上の単位で六〇平方メートルの集会所を、五〇戸に満たない単位で四〇平方メートルの談話室をつくっている。そのうち、「みんなの家」と呼ぶ、心の安らぎを得られるような木造の約六〇棟の集会所、談話室の整備を進めている。

こうした集会所や談話室を健康教育の拠点にして、仮設住宅の生活者の命、健康を守りたいと思った。

思い浮かんだのは、東日本大震災被災地での行政支援活動だった。ある避難所で、畳の上に一五人くらいが車座になって話は進んだ。目の前に、お茶や菓子が並ぶ。雰囲気は、井戸端会議のような「お茶っこ」会だ。保健師の話のあと、私が問いかけた。

「ふだん家でできていて、ここでできないこと、不便なことはありますか」

六〇歳代の女性の声だった。

「洗濯物は干す場所があっても、布団を干すところがなくて困っているの」

みんなで解決策を考えることにした。

保健師がこう言った。

「晴れた日、車のボンネットが熱くなりますよね。そこに布団を置いたらどうでしょうか」

みんなが「それならできる」とうなずいて実行することになったのだ。

そんな場を、仮設住宅の集会所や談話室でつくれないだろうか。

私は、保健所の保健師や環境衛生監視員、食品衛生監視員、栄養士、歯科衛生士など人的資源を活用して、ざっくばらんな健康教育をしてはどうかと思った。

塚原仮設住宅の集会所を訪れたとき、自治会の役員からこんな質問と要望をうけた。

中臣さんの環境衛生ウオッチング

「蛇口の水がカルキ臭くてしようがないの。委託業者が水槽のなかに消毒用の塩素を入れていると聞きました。入れすぎではないでしょうか。保健所に調べてほしいのです」

この要望については、後日、私から熊本市保健所へ連絡して調査してもらった。

実態は、市の水道水が受水槽に貯められていて、蛇口末端の遊離残留塩素濃度が一リットルあたり〇・二ミリグラムで問題なかった。生活者の不安は解消されたのだ。

原因は、井戸を掘って飲み水にしている家が多かったことだ。通常、塩素を入れていない。そのため、水のなかの塩素臭に敏感になったのだ。

こうした一連の流れは、集会所や談話室での健康教育につながるものである。

仮設住宅の生活者の健康面、衛生面の疑問に一つひとつ答えていくこと、それが結果的に生活者の命、健康をまもることにつながり、大きな意味をもつと思うのである。